

# カフカの『判決』における連続する「お見通し発言」——思考動詞のスキープの解釈をめぐって——

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00057384">https://doi.org/10.24517/00057384</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# カフカの『判決』における連続する「お見通し発言」 ——思考動詞のスコープの解釈をめぐって——

西 嶋 義 憲

## 0. はじめに

「お見通し発言」は、カフカ作品の作中登場人物間の会話において、相手に対する精神的優位性や相手への支配力を誇示する手段の1つとして用いられる発話である。この発話は、一般に、2人称代名詞を主語とし、述語に思考動詞を用いた直説法現在形の叙述文という表現形式で出現する。しかしながら、「お見通し発言」における思考動詞のスコープ（支配領域）、すなわち、思考動詞によって導入され、思考内容を引用する節の範囲がどこまで及ぶのかについては必ずしも明らかではない場合がある。それは、思考内容を引用する従属接続詞の省略、接続法の不使用といった理由により、引用される節のスコープを限定する形式的制約が不明瞭になり、そのために、思考動詞に後続する思考内容を表わす節の自立性が相対的に高まるからである。その結果、スコープに関して曖昧性が生じることになる。その曖昧性により、思考動詞の及ぶスコープの解釈に違いが起きる。本稿では、思考動詞とそれに関連づけられる思考内容を表す節との関係、すなわち、スコープに焦点を当てることにより、重文・複文形式の「お見通し発言」の構造に着目し、「お見通し発言」の連続する複合的な使用例を取り挙げ、その構造を分析する。さらに、さまざまな言語の翻訳例を用いて、スコープの異なりを確認し、その効果の違いを論じる。これは、「お見通し発言」の新たな側面の指摘にとどまらず、「お見通し発言」に関わる新たな研究の展開の可能性を探る試みでもある。

## 1. 問題提起

### 1.1. 「お見通し発言」とは

「お見通し発言」とは、具体的にどのような発話なのかを、西嶋 (2016) に基づいて説明しよう (pp. 19-24)。フランツ・カフカ (Franz Kafka) の短編小説『判決』(*Das Urteil*) に「お見通し発言」と見なすことができる発話が認められる。下に引用してある発話文の中で、下線を施した発話がそれである。この発話は、主人公ゲオルク (Georg) が父親の部屋を訪れた際に、父親が発したものだ。父親は、この発言の直前まで弱々しく描かれ、ベッドに横になっていた。ところが、突然立ち上がり、倒れそうになりながらも何とか持ちこたえる。その時、期待に反し、息子のゲオルクは助けに近づいて来ない。その場面で、息子が考えていることを当の本人に向かって断定的に言明するのである。なお、ドイツ語原文の後に、参考のために当該箇所日本語訳も載せておく。

“Bleib, wo du bist, ich brauche dich nicht! Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst. Daß du dich nicht irrst! Ich bin noch immer der viel Stärkere. Allein hätte ich vielleicht zurückweichen müssen, aber so hat mir die Mutter ihre Kraft abgegeben, mit deinem Freund habe ich mich herrlich verbunden, deine Kundschaft habe ich hier in der Tasche!”

(*Das Urteil, Drucke zu Lebzeiten*, hrsg. von Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, pp. 58-59)

「そこにじっとしているがいい、わたしはおまえなど要らない！ おまえは、自分はここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。 思い違いはしないがいい。いまだってわたしのほうがはるかに強いのだ。一人ならばわたしは引っ込んでいなければならなかったかもしれん、だが、お母さんがわたしに力をかしてくれ

たのだ、おまえの友達ともわしはかたく同盟を結んでいる、このポケットには彼から来たお前の情報がいっているのだぞ！」

(円子修平訳『判決』、『決定版カフカ全集1』新潮社, 1982, pp. 43-44.)

ドイツ語原文中の下線を施した発話は、主語が2人称代名詞の *du* であり、その定動詞として *denkst* (不定詞は *denken*、英語の *think* に相当) という思考動詞を用いた直説法現在形の平叙文である。この思考内容を引用する形式の発話により、通常は知りえないはずの、対話相手の息子の思考内容を当の本人に向かって断定的に表明している。その意味で、コミュニケーション上の奇妙さが感じられる。しかし、それが発せられる場面を考慮すると、その発話の効力が理解できる。この発話がなされるのは、すでに述べたように、それまで耄碌して弱っていたはずの父親が突如として元気を取り戻し、父子間の力関係が逆転し、父親が息子よりも優位にあることを誇示する場面においてである。息子から父親へと支配関係の転換がもたらされるという背景を考慮すると、この発話は、相手に対して自らが優位にあることを誇示する手段として利用されていると解釈することができる。

カフカ作品では、このような、話者が対話相手の内的世界を断定的に表現する2人称断定文の発話例が散見される。そういった発話がなされる背景には、相手の考えや心が見通せる能力があるという前提がなければならない。では、相手の考えを見通すことはそもそも可能なのだろうか。この点について、たとえば、上に引用した「お見通し発言」が出現する少し前の箇所<sup>1</sup>に次のような記述がある。息子が父親に隠れて密かに行動していたが、父親が、その行動の意図を見破っていることを指摘する箇所である<sup>1</sup>。意図を見抜いていることを表現する動詞として、*durchschauen* (英語の *see through* に相当) が使用されている。次に引用したテキストで、下線を施して示した。参考のために、ドイツ語原文の後に日本語訳も載せておく。

<sup>1</sup> この箇所について高橋 (2003) は、「ゲオルクの悪行を暴く過程で父親は全知全能の人物へと変身する」と解説している (p. 81)。

Darum doch sperrst du dich in dein Bureau niemand soll stören, der Chef ist beschäftigt – nur damit du deine falschen Briefchen nach Rußland schreiben kannst. Aber den Vater muß glücklicherweise niemand lehren, den Sohn zu durchschauen.

(*Das Urteil*, p. 56)

だからおまえは事務室に閉じこもった、主人多忙ニツキ、何人モ入ルベカラズ、とな、——だがそれは誰にも邪魔されずにロシアへ贗の手紙を書くためだった。しかし、幸いなことに、父親は息子の心を見抜くことぐらい、誰にも教えてもらう必要がないのだ。(円子修平訳『判決』, 『決定版カフカ全集 1』新潮社, 1982, p. 42)

上のドイツ語テキストでは「見通す」(日本語訳では「心を見抜く」と表現されている)ことを意味する *durchschauen* という動詞が使われているが、この動詞の基本的な意味を『ドイツ語ユニバーサル辞典』(*Deutsches Universalwörterbuch*: 以下、*DUW* と略す)<sup>2</sup>で確認しておこう。

a) durch den äußeren Schein hindurch in seiner wahren Gestalt, in seinen verborgenen, vertuschten Zielsetzungen erkennen: jmds. Absichten, Motive, jmds. Wesen d.; du bist durchschaut (deine Absichten sind erkannt); b) verstehen, begreifen; die Regeln sind nicht leicht zu d. (*DUW*: p. 412)

試訳: a) 外見を通してその真の姿を、その隠され、秘匿されて設定された目標を認識すること: 誰かの意図、動機を、誰かの本質を見抜く; お前のことはお見通しだ(お前の意図はわかっている); b) 理解する、把握する; 規則は容易には理解しえない。

<sup>2</sup> *Duden Deutsches Universal Wörterbuch A-Z*. Hrsg. u. bearb. vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion. 3., völlig neu bearb. u. erw. Aufl., Mannheim usw.: Duden Verlag, 1996.

辞書の定義では細かく説明されているが、ここでは、*durchschauen* の意味は基本的に相手の意図を見抜くことだと確認できれば十分であろう。このように、他者の心を見通すこと、すなわち、他者の考えていることを理解し、それを相手に直接かつ断定的に突きつけることが、とりもなおさず、その相手に対して自分の精神的優位性を戦略的に示す手段になる。そこで論者は、相手の考えを見通していることを断定的に表現する発話を、先の動詞 *durchschauen* を使用して、「お見通し発言」(*durchschauende Äußerung*) と名づけた(西嶋, 2004; Nishijima, 2005)。このように、カフカ作品においては、対話相手の意図を「見通し」ていることを表明することが重要な意味をもつ場合がある。

ここで、「お見通し発言」を形式・意味・機能という3つの観点から改めてまとめておこう。

形式：2 人称主語、定動詞は思考や意志を表わす動詞や助動詞、直説法現在形の平叙文形式。ただし、推量などのモダリティを表わす助動詞や副詞・心態詞は含まない。通常は、単文もしくは複文が用いられる<sup>3</sup>。

内容：対話相手の思考内容などの内面世界を断定的に表現する。

機能：領分を侵し、対話相手の思考内容に立ち入り、相手の考えを知っていることを示すことにより、相手より優位な立場にいること、すなわち優位性や支配力を誇示する<sup>4</sup>。

次節では、先ほど挙げた「お見通し発言」の例文に2通りの解釈があることを指摘する。

<sup>3</sup> しかしながら、後で議論するように、重文において複合的に使用される場合もある。もしその議論が正しければ、この規定に変更をせまることになる。

<sup>4</sup> この機能以外にも、相手への深い共感を示す場合や話を展開させる働きがあることが確認されている。詳細は、西嶋 (2016)を参照のこと。また、Nishijima (2019)は、「お見通し発言」を言語相互行為上の言葉遊び (Wordplay) と捉える試みである。

## 1.2. 「お見通し発言」とその解釈

煩雑さを避けるために、前節で例示した「お見通し発言」に相当する発話を再掲する。

Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.

この発話には、定動詞 *denkst* (不定形は *denken*) のスコープ (支配領域) をめぐって 2 通りの解釈がある。その解釈の違いは翻訳に反映されている。まず 1 つの訳例を示す。

「おまえは、駆け寄ることはできるが、そうしないのはただ自分がそうしたくないからだと思っている。」(佐々木博康訳『判決』, カフカ研究会新居浜集会配布資料, 2018)

この佐々木訳では、*denkst* の目的節としてのスコープが文末の理由を導く従属接続詞 *weil* (英語の *because* に相当) 節末まで及ぶと解釈されていることがわかる。次に、これと異なる解釈が反映した訳例を見てみよう。

「お前にはまだここまでやってくる力があると、お前は思っているんだ。それだにお前はよってもこない。そうしたいと思うからだ。」(原田義人訳『判決』, 『世界文学大系 58 カフカ』, 筑摩書房, 1960, pp. 414-415)

こちらの原田訳では、思考動詞 *denkst* の目的節のスコープが等位接続詞 *und* (英語の *and* に相当) の前までと理解されていることが分かる。日本語訳の 3 文目にも「思う」という表現が使われているが、これは原文の理由を導く *weil* 節における述語の意志を表す話法の助動詞 *wollen* (英語の意志未来の *will* に相当) の定動詞 *willst* に対応している。それが「したいと思う」と訳されているので

あって、思考動詞の *denkst* の訳語ではない。

このように、訳例からも *denkst* の目的節のスコープに関して 2 つの解釈が存在することが分かる。とすると、「お見通し発言」の内容自体も変わってくることになる。そもそも、この発話にはどうして 2 つの解釈が生じるのだろうか。次の第 2 章では、その理由を明らかにするために、問題となる発話文の構造分析を試みる。

## 2. 分析と考察

### 2.1. スコープの分析

ページをさかのぼる煩雑さを避けるために、ドイツ語原文の当該箇所をグロスを施して再掲する。

*Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen*  
 you think you have yet the power here to come  
 ('you think you have the power to come here yet')  
*und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.*  
 and hold yourself only back because you so will  
 ('and [you] only hold yourself back because you will do so')

文頭の *Du denkst* に後続する節が、内容をまとめる従属接続詞 *dass* (もしくは *daß*、英語の *that* に相当) で導入されるか、もしくは、間接話法であることを示す接続法 1 式で提示されていれば、そのような文は、*denken* の目的節のスコープに収まると容易に判断できる。ところが、後続する節には *dass* が使われず、また、すべて口語的に直説法で表現されているために、スコープの範囲を特定する明確な形式的制約が消え、後続する節の自立性が相対的に高められている。その結果、そこにスコープに関する解釈に曖昧性が生じることになる。

*Du denkst* が支配する目的節として、そのスコープに入る可能性があるのは、その直後に来る *du hast* で始まる節と *und* という等位接続詞の後にある *hältst* (後

続する *zurück* (英語の *back* に相当) を前綴りとする分離動詞の基本動詞で、不定詞は *halten*、英語の *hold* に相当) で始まる節の 2 者である<sup>5</sup>。前者は「おまえはこちらに来る力をまだ有している (*du hast noch die Kraft, hierher zu kommen*)」という命題(「命題 1」と呼ぶことにする)を、後者は *weil* に導かれる従属節<sup>6</sup>を含めて「[おまえは] そのまま何もしないでじっとしている (のは、そうしたいからである) (*[du] hältst dich bloß zurück(, weil du so willst)*)」という命題(「命題 2」と呼ぶ)を、それぞれ表している。この 2 つの命題を表わす 2 つの節が並列関係を表わす等位接続詞 *und* で結び付けられているので、*Du denkst* の目的節としてのスコープが、前者だけを含むのか、あるいは前者と後者の両方を含むのかで、次の解釈(1)と解釈(2)の 2 通りの解釈が生じることになる。解釈(1)は命題 1 だけを含み、解釈(2)は命題 1 と命題 2 の両方を含んでいる：

解釈(1) *du hast noch die Kraft, hierher zu kommen*

解釈(2) *du hast noch die Kraft, hierher zu kommen und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.*

### 2. 1. 1. 解釈(2)の根拠

#### 2. 1. 1. 1. 形式面：主語 *du* の省略

等位接続詞 *und* の後に定動詞 *hältst* があるが、その主語 *du* が省略されている。この省略は、*und* をはさんで、その前後の定動詞 *hast* (不定詞は *haben*) と *hältst* が同じ主語を持つので、後半の定動詞 *hältst* の主語を省略したと説明することができる(下の例では[ ]を用いて、省略された *du* を補っている)。その場合、両節とも *denken* の目的節として、その支配下に置かれているという解釈になる。

<sup>5</sup> “*sich zurückhalten*”の意味は、*DUW*によると、次のように説明されている：“*sich beherrschen; sich dazu zwingen, etw. nicht zu tun*” (自制する；あえて何かをしないようにする) *DUW*, 4. Aufl. p.1875. この文脈では、進み出る行動が期待されている場面で、その意識の流れに逆行して (*zurück*) その場にとどまっている (*sich halten*) という意味と理解される。

<sup>6</sup> ドイツ語文法では通常「副文」と呼ぶが、ここではより一般的で馴染みのある名称「従属節」を使うことにする。

Du denkst, {du hast noch die Kraft, hierher zu kommen}<sub>1</sub>  
 und {[du] hältst dich bloß zurück, weil du so willst}<sub>2</sub>.

構造記述： {Du denkst, {S}<sub>1</sub> und {S}<sub>2</sub>}<sub>3</sub>. (= {S, {S}<sub>1</sub> und {S}<sub>2</sub>}<sub>3</sub>)

### 2.1.1.2. 内容面：思考内容の対立

この解釈で対立するのは、{S}<sub>1</sub> と {S}<sub>2</sub> の内容である。すなわち、2 つの節で表わされる思考内容「こちらに来る力をまだ有している」こと（命題 1、ここでは {S}<sub>1</sub>）と「そのまま何もしないでじっとしている（のは、そうしたいからである）」こと（命題 2、ここでは {S}<sub>2</sub>）の 2 つである。その両文が *Du denkst* のスコープ内に収められ、{S}<sub>3</sub> を構成している。

### 2.1.1.3. 副詞 *bloß* の役割

この発言の *und* に後続する文中に副詞 *bloß* が使われていることに注目したい。これは、*DUW* によれば、*nur*（英語の *only* に相当）と説明される（p. 300）。つまり、この副詞は、それを含む文で叙述される行動を強調している。本稿で例として取り挙げている発話では *hältst dich bloß zurück* の行動である *sich zurückhalten* すること（前提として前進が期待されるが、その期待に反し、その場に居続けること）自体が強調されている。なぜ強調されるかという、その前段にある *Du denkst, du hast noch die Kraft, hierher zu kommen*（近づく力がまだあるとおまえが思っていること）で表現されていることと対比される表現だからである。そのことは、*zurück*（英語の *back* に相当）の存在が裏づけている。この語は、脚注 5 で触れたように、進むことが期待される場面で、そうはしないことが、意識の上で後ずさりしているような感覚を表現する<sup>7</sup>。そのため、おまえは近づく力があると思いついでいるが、実際はその意識に反してその場に

<sup>7</sup> ドイツの駅のホームで電車が入線してくる際、たとえば“Bitte, zurückbleiben!”というアナウンスが聞こえることがある。これは、乗車するためには電車に近づく必要があるが、そのような意識の流れに反して (*zurück*)、その場に居続けること (*bleiben*) が要求されている。英語の *stay* に相当する *bleiben* が使われていることからわかるように、実際に後ずさりするわけではない。

いるだけではないか、というように、頭で考えていることと、実際の行動の乖離を明確に表現していることが分かる。

### 2.1.1.3. 問題点

解釈(2)だと、命題1と命題2の両者を *Du denkst* が支配することになる。すなわち、「こちらに近づいて来る力をまだ有していること」と「そのまま何もしないでじっとしている (のは、そうしていたいからである)」の両命題を「思っている」という思考動詞が同様に支配することになる。

この解釈は理解しにくいように思われる。なぜなら、2つの命題は、提示される事態の性質がかなり異なるからである。つまり、命題1の、こちらに近づいて来る力があることは、基本的に本人にしか分からないことである。すなわち、本人がそう思い込んでいることである。それが *denken* という思考動詞によって導入され、そのような力を本人があると思っている、思い込んでいるということが示されている。そのため、思考内容を表現する *du denkst* とは論理的に結びつきやすい。ところが、じっとして何もしない、つまり、近づくという行動に出ず、その場にとどまるという事態は、現実の行動の指摘だと理解できる。もしそうなら、実際にその様子を見れば了解できる明瞭な事実なので、思考内容を表す *Du denkst* とは結びつきにくい。そして、その行動について、後続する理由節が、そのような行動をとっている理由として、そのような意志をもっているからだと説明している。

## 2.1.2. 解釈(1)の根拠

### 2.1.2.1. 形式面：duの省略

定動詞 *hältst* が主節<sup>8</sup>の定動詞 *denkst* と同格と見なすことも可能である。すなわち、*denken* の目的節のスコープを *und* の前までと捉え、この発話は *und* をはさんで、その前後の2つの主節で構成されていると考えることもできる。そう考えると、*Du denkst* で始まる主節{S}<sub>4</sub>は、その目的節{S}<sub>5</sub>のみを支配下におく

<sup>8</sup> ドイツ語文法では通常「主文」というが、ここではより一般的で馴染みのある名称の「主節」を使うことにする。

ことになる。そして、*und* に後続する節 {S}<sub>6</sub> は、{S}<sub>4</sub> と同等の主節と見なされ、それに理由を付与する節 {S}<sub>7</sub> が後続している構造だと理解される。

Du denkst, {du hast noch die Kraft, hierher zu kommen}<sub>5</sub>  
und [du] hältst dich bloß zurück, {weil du so willst}<sub>7</sub>.

構造記述：

{ {Du denkst, {S}<sub>5</sub> }<sub>4</sub> und { [du] hältst dich bloß zurück, {S}<sub>7</sub> }<sub>6</sub> }<sub>8</sub>.  
( = { {S, {S}<sub>5</sub> }<sub>4</sub> und {S, {S}<sub>7</sub> }<sub>6</sub> }<sub>8</sub>.)

### 2.1.2.2. 内容面：思考と態度の対立

この場合、*denken* のスコープは *und* の前の節 ({S}<sub>5</sub>) までである。すなわち、*denken* のスコープ内に収まるのは、命題 1 の「おまえは近づく力をまだ有している」のみである。

この構造記述によると、「おまえは近づく力をまだ有している (命題 1 = {S}<sub>5</sub>) と思い込んでいること」 ({S}<sub>4</sub>) と、実際には「[おまえが] そのまま何もしないでじっとしている (のは、そうしたいから)」 (命題 2 = {S}<sub>6</sub>) とが対立していることになる。この場合、思っていることと実際の行動が対比されていることになる。

### 2.1.3. 合理的な解釈

上では、2 つの解釈の構造記述を試みた。どちらの解釈がより合理的だろうか。

思考動詞は目的節として思考内容をスコープに収めるのが普通である。そこから考えれば、おのずと誤解は解消されるように思われる。後続する 2 つの節をここで改めて比べてみよう。

上節 2.1.1.1.において扱った解釈(2)は、命題 1 の「おまえはこちらに来る力をまだ有している」と命題 2 の「[おまえが] そのまま何もしないでじっとしている (のは、そうしたいからだ)」の両者を思考動詞 *denken* のスコープに収め

ている。他方、2.1.2.において扱った解釈(1)は、命題1のみを目的節のスコープに収め、命題2は、思考動詞 *denken* を含む主節に並置される主節として提示されているという解釈である。

「[おまえが]そのまま何もしないでじっとしている」ことは、思考動詞のスコープに収められる事態なのであろうか。これは、思考内容ではなく、実際に目に見える、具体的な行動と考えられる。この点については、すでに触れたように、*bloß* という副詞に注目すると、これは、思考内容との対比を明確にし、実際の行動（その場に居続けること）を強調する表現だと理解することができる。もしそうなら、思考内容と現実の行動の対立という解釈を裏付けていることになろう。この説明に基づけば、命題2を思考内容に収めるという解釈には疑問の余地があると言わざるをえないだろう。

もちろん、このような異なる読みを生じさせる原因の1つは、この発話の末尾にある従属節の *weil* 節にもあるようだ。この節は、上記1.1.の規定により、「お見通し発言」の資格を有する。すなわち、従属接続詞 *weil* に導かれる従属節の構造は、2人称 *du* を主語とし、話法の助動詞 *willst* を述語とする構成である。この発話は、2人称代名詞を主体とする思考内容と関わることは明らかである。もし、この従属節を含む命題2が思考動詞 *denken* のスコープに収められるとすれば、思考内容の提示が二重になされることになる。これは通常とは異なる「お見通し発言」の構文のように思われる。

この「お見通し発言」の前半で、まず相手の思考内容、こちらに来る力があると考えていることが提示される。そして、その後半部で、しかし、実際はその場にとどまって、何もしないという事態が指摘される。その何もしないという行動は、相手がそのような意図をもって行動しているからである、と追加的に事情が説明される、という情報の流れになっている。すなわち、「お見通し発言」→ (*bloß* で強調・対比される) 実際の行動 → 「お見通し発言」という連鎖で相手の考えを余すところなく暴露することによって、相手への支配力を強く主張することができている。このような理解に基づけば、*und* の前で *Du denkst* の目的節のスコープが終わり、新たな文が始まると考えたほうが合理的ではないだろうか。

## 2.2. 従属節による「お見通し発言」

上の考察から、1 発話内に複数の「お見通し発言」が現れる可能性があることが確認できた。

{Du denkst, {S}<sub>8</sub>}<sub>10</sub> und {{S}<sub>9</sub>, weil du so willst}<sub>11</sub>}<sub>12</sub>.

従属接続詞 *weil* に導かれる従属節内の話法の助動詞 *willst* も、*denkst* と同様に思考内容（意志）を表現するので、*du* を主語とすれば、相手の考えを断定的に明言することになるため、定義上「お見通し発言」と見なすことができる。前半部の *Du denkst* を含む主節形式による「お見通し発言」では、後続する {S}<sub>8</sub> の内容を「見通し」ていることを表明している。他方、後者の従属節形式による「お見通し発言」では、前置されている主節 {S}<sub>9</sub> で示されている行動の意図を断定的に指摘している。さしあたり、前者を「前置型お見通し発言」、後者を「後置型お見通し発言」と呼ぶことができよう。

このような分析が正しいとすれば、「お見通し発言」は、1 発話に 1 回のみ現れるとは限らないことがわかる。1 つの発話内に複数の「お見通し発言」が出現する可能性があるということだ。では、そのような複合的「お見通し発言」は、これまでどのように認識されてきたのであろうか。そして、それは翻訳にどう反映されているのであろうか。この複合的な「お見通し発言」が意識されて翻訳されているのかどうか、意識されているとすれば、それはどのように訳されてきたのかを検証してみよう。

以下では、これまでに提出されてきた日本語訳、英語訳、中国語訳、韓国語訳を紹介し、2 つの解釈がどのように表わされているのかを確認する。そして、このような *denken* の目的節のスコープを問題にすることで、この従属節としての「お見通し発言」という新たな側面がどのように訳出されているのかを調査する。また、相手の思考内容を断言することによる支配力の誇示という観点から、主節と従属節における「お見通し発言」の効果の違いについても論じることにする。この議論が正しければ、1.1. 節末でまとめた「お見通し発言」の規定を、主節の平叙文（叙述文）だけでなく、従属節にも拡大するように変更する

必要がある。

### 3. 翻訳と解釈

#### 3.1. 訳例提示

『判決』(*Das Urteil*)の訳は筆者が入手しただけでも、日本語訳が11例、英語訳3例、中国語訳2例、韓国語訳1例ある<sup>9</sup>。日本語訳については出版年の古い順から紹介していく。訳文の紹介のあと、簡単にコメントを付す。

- ① 「おまえには手を貸しにくる力があるだろう。しかし、おまえはそこに離れて、身うごきもしない。じつとおまえはそうしていたいのだから。」(大山定一訳『死刑判決』、『カフカ全集 III 変身・流刑地にて・支那の長城・観察』, 新潮社, 1953, p. 51)

原文の定動詞 *denkst* (不定形は *denken*、以下、不定形で提示することにする) は、ここでは推量表現「だろう」として訳出されている。推量表現として訳すことで、「お見通し発言」の有する断定というインパクトはかなり弱められている。この訳では、*denken* の目的節としてのスコープは、等位接続詞 *und* の前までと解釈していることが分かる【**解釈(1)**】。

<sup>9</sup> カフカ作品の日本語訳の多さには目を見張るものがある。粉川哲夫氏は『物語作者フランク・カフカ』が20年以上経って訳出された言い訳を「訳者あとがき」において述べる際、カフカ作品の翻訳の多さについて、分かりにくい日本語で次のように触れている：「しかし日本では、カフカの代表作品の翻訳をあまり変わりばえのしない訳者をひっかえとっかえしてくりかえすことは世界で類のないくらいさかんでも、(後略)」(パイスナー, 1952, 訳書 p. 152)。これはおそらく、日本は、翻訳が学術上1つの業績と見なされる社会であることと無関係ではあるまい。翻訳はそれほど価値のある仕事と見なされているということである。それは、翻訳書では、訳者名が著者名の隣に同格で併記されることから容易に推測できる。なお、「お見通し発言」の日本語訳の問題点については Nishijima (2015) も参照のこと。

- ② 「お前にはまだここまでやってくる力があると、お前は思っているんだ。それだのにお前はよってもこない。そうしたいと思うからだ。」(原田義人訳『判決』, 『世界文学大系 58 カフカ』, 筑摩書房, 1960, p. 414-415)

この文でも、*denken* のスコープは *und* の前までと理解されていることが分かる【**解釈(1)**】。訳語は、「思っているんだ」というようにテイル形を用いて、説明表現として訳されている。「お見通し発言」の効果は緩められている。

- ③ 「こちらへ寄って来る気力は十分にあるが来たくないので差控えているだけの話だ、という態度を見せつけているつもりだろうが、(誤解のないようにしてもらいたい!)」(本野亨一訳『判決』, 角川文庫, 1963, p. 71)

この訳文では、*denken* が直接的に翻訳されていない。「つもりだろう」が *denken* の訳語であると推測できる。「つもり」という意志表現が、推量形とともに用いられているので、「お見通し発言」としての断定の力が弱められている。訳文から *denken* のスコープは、文末まで及んでいることが分かる【**解釈(2)**】。

- ④ 「お前はここに来る力があると思っているのだろう。それなのにお前は遠ざかっている。そうしたいからなあ。」(川崎芳隆・浦山光之訳『判決』, 『変身 他四編』, 旺文社文庫, 1973, p. 14)

この訳では、*denken* のスコープが *und* の前までに限定されるという解釈である【**解釈(1)**】。訳語は「思っているのだろう」というように、テイル形と推量形が使用されている。断定性が弱められている。

- ⑤ 「おまえは、自分にはここへ来る力がまだある、自制しているのは自分がそう望んでいるからだ、と思っている。」(円子修平訳『判決』、『決定版カフカ全集 1』, 新潮社, 1980, p. 43)

この日本語文では、*denken* のスコープは文末まで及んでいることが分かる【**解釈(2)**】。訳語は上例と同様にテイル形を用いている。そのため、説明表現となり、断定の力は弱められている。

- ⑥ 「近づく力はあるんだが、わざと近づかないだけだと思っているな。そうだろう。」(池内紀訳『判決』、『カフカ短篇集』, 岩波文庫, 1987, p. 29)

この訳は、他と比べると例外的である。原文のかかなりの部分が省略された意訳となっているからである。スコープは、文末まで及んでいる【**解釈(2)**】。*denken* の訳語は、テイル形が用いられているだけでなく、確認表現として「そうだろう」が追加されている。反語的な確認要求と理解されるので、断定はそれほど弱められていない印象を与える。

- ⑦ 「お前はまだ、こっちへやってくる力があると思っておる、来たくないから控えているんだ、とな。」(長谷川四郎訳『判決』、『カフカ傑作短篇集』, 福武書店, 1988, p. 21)

この訳文は *denken* のスコープに関して、多少曖昧に表現されているように見える。思考内容をまとめる助詞「と」が前半と後半に現れているので、文末まで及ぶと解釈していると推測できる【**解釈(2)**】。訳語は「思っておる」というように、テイル形の変異形が使用されているが、基本的には「思っている」と同義であり、説明文としての性格づけがなされている。そのため、断定の力は弱い。

- ⑧ 「手をさしのべる力はあるけれど、そんな気がないから、さしのべないだけだな 思っているのか。」(丘沢静也訳『判決』、『変身／掟の前で 他 2 編』, 光文社古典新訳文庫, 2007, p. 26)

文末に *denken* の対応表現が使われていることから、スコープは文末まで及んでいることが分かる【**解釈(2)**】。訳語は、「思っているのか」のように、テイル形の疑問形式で表現されている。この疑問形により、断定の力はかなり和らげられている。

- ⑨ 「お前のつもりでは、ここまで近づいてくる力はあるが、来るのがいやだからそこから動かないというのだろうが、(思い違いでなければいいがな)！」(柴田翔訳『判決』、『カフカ・セレクションII 運動／拘束』, ちくま文庫, 2008, p. 145)

この訳文もかなり異色と言える。思考動詞 *denken* を「つもり」という意志を表す表現で訳しているだけでなく、文末にそれに呼応する表現「というのだろうか」という推量形と疑問形を用いているからである。このことから、スコープは文末まで及んでいることが分かる【**解釈(2)**】。断定機能はかなり弱められている。

- ⑩ 「お前は、自分はこちらへ来るだけの力をまだ持っていると思っている。そして、自分がそうしたいと思うが故に、ただその場にとどまっていると思っている。」(野村廣之訳『判決』、『フランツ・カフカ入門』, 三恵社, 2011, p. 52)

思考動詞 *denken* のスコープは、「思っている」という表現を前半と後半で繰り返し用いていることから、後半まで及んでいることが分かる【**解釈(2)**】。両者とも、テイル形を用いているので、断定の力は弱められている。なお、2 文目の「思う」は話法の助動詞 *willst (wollen)* の訳語だと判断される。

- ⑪ 「おまえは、駆け寄ることはできるが、そうしないのはただ自分が  
 そうしたくないからだと思っている。」(佐々木博康訳『判決』, カ  
 フカ研究会新居浜集会配布資料, 2018)

この訳文も、1.2.節で確認したように、*denken* のスコープを文末まで及ぶと捉えていることが分かる【**解釈(2)**】。訳文は、テイル形を用いて、客観的な説明文として表現している。

次は、英語訳である。3種類が手元にある。

- ⑫ 英語訳 1

“You think you have strength enough to come over here and that you’re  
 only hanging back of your own accord.”

(translated by Willa and Edwin Muir. Nahm N. Glatzer (ed.): *The  
 Collected Short Stories of Franz Kafka*, Harmondsworth: Penguin  
 Books, 1988, p. 86)<sup>10</sup>

この訳文では、*think* (ドイツ語の *denken* に相当) のとる目的節のスコープが *and* (ドイツ語の *und* に相当) の後の文まで及んでいることは接続詞 *that* の存在から明らかである【**解釈(2)**】。これにより、*that* 以下の文が *think* の支配下にあることが明示される。また、原文の副詞 *bloß* は、以下の2つの英語訳と異なり、理由ではなく、*hanging back* の直前に置かれ、それが表現するドイツ語主節の「その場にいること ([du] hältst dich bloß zurück)」を強調している。これは、以下で論じるように、ドイツ語原文の構造を反映した訳だと言えよう。

<sup>10</sup> この英語訳で使われている“hang back”の意味は、『オックスフォード上級学習者辞典』では次のように説明されている: to hesitate because you are nervous about doing or saying sth. (何かをしたり言ったりすることに神経質になっているためにためらうこと) *Oxford Advanced Learner’s Dictionary*, 8<sup>th</sup> edition, Oxford: Oxford University Press, p. 704. また、“of your own accord”の意味は、同じ辞典で次のように規定されている: without being asked, forced or helped. (求められたり、強制されたり、援助されることなく) *ibid*, p. 9.

## ⑬ 英語訳 2

“You think you still have the strength to come here but are holding yourself back just because it's your will.”

(Translation: Eulenspiegel. Retrieved from:  
<https://web.usd475.org/school/jchs/staff/artley/SiteAssets/SitePages/Home/The%20Judgment.pdf>)

この英訳文は、上例と異なり、ドイツ語の順接の等位接続詞 *und* に対応する *and* ではなく、逆接の等位接続詞 *but* が用いられている。これにより、先行する文の何かと対比されていることが示唆されるが、*but* 以下を主節として捉えるのか、従属節として捉えるのかによって解釈は変わってくる。前者のように主節と捉えた場合、対立するのは、「こちらに来る力がまだあると思こんでいる」こと (You think you still have the strength to come here) と「自制して動かないでいる」こと ([you] are holding yourself back) である。他方、従属節としてとらえた場合、*think* の思考内容どうしの対比、すなわち、1) こちらに来る力を持っていること (you still have the strength to come here) と 2) 動かずに自制していること ([you] are holding yourself back) が対比されることになる。前者のほうが自然な解釈のように思われる。これが正しいとすれば、スコープは *und* の前までとなる【**解釈(1)**】。

しかしながら、この英語訳では、ドイツ語原文の *bloß* が、それが含まれている主節の「その場にいること ([du] hältst dich bloß zurück)」を強調しているのではなく、後続する *weil* によって導入される理由節 (*weil du so willst*) を強調している。それは、*weil* に対応する *because* の前に、*bloß* の訳語と思われる *just* が置かれているからである。しかし、このような解釈に基づく英語訳は妥当でないように思われる。原文に立ち戻ってみよう。ドイツ語の関係する箇所とそれに対応する英語の部分引用する（問題となる語に下線を施してある）。

(a) und hältst dich bloß zurück, weil du so willst.

(b) but are holding yourself back just because it's your will.

(b)では、原文の *bloß* に対応する英語の *just* が *because* 節を強調するように位置に置かれているが、原文ではどうであろうか。原文(a)では、*bloß* は *weil* の前にはない。文法的には、*weil* 節を強調するために、その直前に *bloß* を置くことは可能である。しかしながら、そうはなっていない。ということは、*bloß* が *weil* 節を強調するという解釈には無理があり、むしろそれが本来位置している主節の “[du] hältst dich zurück” を強調していると理解するのが自然なのではないだろうか。この議論が正しいとすれば、英語訳⑬の *just* による理由節の強調という解釈は誤りということになる。

#### ⑭ 英語訳 3

“You think you still have the strength to come here and are holding yourself back only because that’s what you want.”

(translation by Ian Johnston of Vancouver Island University, Nanaimo, BC. Retrieved from

<http://johnstoniatexts.x10host.com/kafka/judgmenthtml.html>)

この訳文は、⑬と違って、原文の *und* の訳語として *and* を用いているが、使用している表現も似かよっているので、ほとんど同じ内容を表しているように思われる。しかしながら、解釈はどうであろうか。⑬のように *but* を使って対比されているわけではないので、*and* の後の節も *think* のスコープに収められている可能性も否定できない。そうではあるが、⑬と同様に、原文の *bloß* が *only* と訳され、それが後続する *because* 節の前に置かれているので、理由を強調していることになる。これは、その直前の節が表す行動と強く関係づけていることは明らかである。とするならば、*and* 以下は *think* の支配下にないと考えるのが自然な解釈になることになる [解釈(1)]。

さて、次は中国語訳である。2つの訳例が手元にある。

⑮ 中国語訳 1<sup>11</sup>

你 在想, 你 还 有 力量 走到  
 あなた 思っている、あなた まだ ある 力 歩いて来る  
 我这里来,  
 私のところ、  
 (あなたは私のところに歩いて来る力がまだあると思っている)  
 只 因为 你 不愿意 过来 才 站 在 那里 不动。  
 ただ から あなた 嫌だ 来る こと 立つ に そこ 動かない。  
 (ただあなたは来るのが嫌だから、そこに立って動かない)  
 (孙坤荣訳《判決》《变形记 卡夫卡中短篇小说选》北京燕山出版社,  
 2011, pp. 68-69)

提供されたグロスと日本語訳から判断する限り、*denken* に対応する「在想」の  
 スコープは原文の *und* の前までのようである [解釈(1)]。また、ドイツ語原文の  
 副詞 *bloß* は「只」(ただ)と訳され、理由を導く「因为」の直前に置かれ、そ  
 れを修飾している。これは、英語訳の⑬と⑭と同様に、理由を強調し、後続す  
 る節の表わす行動と強く関連づけている。上で論じたように、ドイツ語原文の  
 構造を反映した翻訳とは言いがたい。

## ⑯ 中国語訳 2

你 以为, 走过来的 力气 你 还 有,  
 あなた 思っている、歩いて来る 力 あなた まだ ある、  
 (あなたは歩いて来る力がまだあると思っている)  
 只是 因为 不想 过来 就 没动。  
 ただ から したくない 来る こと 動かない。  
 (ただ来たくないから動かない)  
 (杨劲訳《判決》《卡夫卡中短篇小说选》人民文学出版社, 2003, p. 9)

<sup>11</sup> 中国語訳への日本語グロス付与およびその解釈については中国語母語話者の趙東玲氏  
 (金沢大学大学院博士後期課程)の協力を得た。記して感謝申し上げる。

この中国語訳も、グロスと日本語訳を見る限り、*denken* の訳語の「以为」のスコープは、上の中国語訳⑮と同様に、原文の *und* の前までのようである【**解釈(1)**】。この翻訳も、上の訳と同様に、ドイツ語原文の副詞 *bloß* は「只」(ただ)と訳し、理由を導く「因为」の直前に置き、それを修飾している。これは、英語訳の⑬と⑭と同様に、理由を強調し、後続する節の表わす行動と強く関連づけている。しかしながら、上で論じたように、ドイツ語原文の構造を反映した翻訳とは言いがたい。

最後に取り挙げるのは韓国語訳である。

⑰ 韓国語訳<sup>12</sup>

너-는 네-가 아직-은 이리-로 오-르  
 ne-nun ney-ka acik-un ili-lo o-l  
 お前-は お前-が 未だ-は こちら-へ 来る-未来(意志形)  
 힘-은 있-지만  
 him-un iss-ciman  
 力-は ある-が(逆接)

(お前は、お前が未だこちらに来ようとする力はあるが)

네 뜻-이 그렇-기 때문-에  
 ney ttus-i kuleh-ki ttaymun-ey  
 お前(の) 意志-が そうである-名詞化接辞 為-に  
 그냥 그대로 있-는 거-라고  
 kunyang kutaylo iss-nun ke-lako  
 ただ そのまま 居る-連体形現在 の-だと  
 생각하-는데, 착각하-지 말-아라!  
 sayngkakha-nundey chakkakha-ci mal-ala  
 思っている-けど 錯覚する-禁止-命令

(お前の意志がそうであるためにただそのまま居るのだと思って

<sup>12</sup> 韓国語訳への日本語グロス付与およびその解釈は韓国語母語話者の崔チョンア氏(金沢大学客員研究員)の協力を得た。記して感謝申し上げる。

いるけど 勘違いするな！)  
 (이영애 옮김, 『판결』, 『변신·시골의사(세계문학전집 4)』민음사,  
 1998, p. 92)

韓国語訳に付されたグロスを見る限り、思考動詞「생각하-」が文末に位置しているので、思考動詞のスコープはこの発話全体に及んでいることがわかる【**解釈(2)**】。ドイツ語の副詞 *bloß* は「그냥」(ただ)と訳され、その直後の「그대로 있」(そのまま居る)を修飾している。これはドイツ語原文における *bloß* の位置とその語順どおりの修飾先を適切に反映した訳だと言える。

### 3.2. 翻訳の傾向

以上、『判決』に見られた「お見通し発言」について、その日本語訳、英語訳、中国語訳、韓国語訳とその解釈を見てきた。これらを検討した結果、ドイツ語原文の理解に違いが見られることが分かった。

日本語訳を見る限り、11例中8例(72.7%)は解釈(2)、すなわち、命題1と命題2の両方を *denken* の支配下におくという解釈を採用している。他方、解釈(1)、すなわち、命題1のみを *denken* の支配スコープ内におく解釈を反映しているのは、訳例①、②、④の3例のみである(27.3%)。なぜこのような分布になっているのか、その理由の詳細は分からないが、解釈(1)を採用しているのは、いずれも、1950年代から70年代にかけて出版された、初期の4翻訳のうちの3翻訳に限定されている。1980年代から2018年までに現われた訳はすべて解釈(2)である。この分布が示唆しているのは、ある時期に何らかの権威をもった訳者がある解釈に基づく訳を提出したら、それ以降の訳は、基本的にその解釈を踏襲しようとする傾向である。翻訳する際、先行する翻訳を参考にすることはよくあることだ。その際にあえて冒険をせず、その「権威ある」訳を継承すれば、それは少なくとも無難な翻訳と見なされるからである。

英語訳1(⑫)は、*and* の後に接続詞 *that* が置かれているので、命題1だけでなく、命題2も *think* の支配下にあることが分かる。すなわち、解釈(2)のスコープ解釈に基づいていることが分かる。他方、英語訳2(⑬)と英語訳3(⑭)は、

*but* や *and* の後に接続詞 *that* がないので、解釈(1)と解釈(2)の両解釈が可能である。しかしながら、上で議論したように、文脈から解釈(1)を採用している可能性が高い。また、ドイツ語原文の副詞 *bloß* であるが、これは *only* もしくは *just* と訳されている。英語訳 1 (⑫) では、ドイツ語原文の構造を反映して「その場に居ること」という主節に対する箇所を修飾して強調しているが、英語訳 2 および 3 (⑬と⑭) では、理由を導く *because* の直前に置かれ、それを強調し、異なる解釈を提示している。

中国語訳 1 (⑮) と中国語訳 2 (⑯) は、付されたグロスから判断する限り、両者とも解釈(1)の立場を取っていると理解される。しかしながら、原文の副詞 *bloß* は「只」と訳され、理由を強調している。その点で、ドイツ語の構造とは異なる解釈をしている。

韓国語訳 (⑰) は、グロスを見る限り、明らかに解釈(2)を採用している。しかしながら、原文の副詞 *bloß* はドイツ語原文の構造を反映して「その場に居ること」という主節に対する箇所を強調している。

### 3.3. 合理的な解釈と「お見通し発言」

筆者は、2.1.3. で論じたように、解釈(1)の立場をとる。この発話では、まず、相手の考えていることを説明し、次に、それを相手の実際の行動と対比していると考えからである。そして、その実際の行動も、相手の意志によるものだと相手が勝手に理由づけしているにすぎないと断言している。その対比が2種類の「お見通し発言」によって実現されていると主張したい。すなわち、*Du denkst* で始まる「お見通し発言」により、相手が「来ようとすればいつでも来られる力がある」と思いこんでいることを指摘する。そう思い込んでいるが、実際はその場にとどまることしかできていない。しかし、それも自分の意志でそうしているのだと勝手に理由づけしている、と従属節形式の「お見通し発言」で暴露している。このような「お見通し発言」に複合的連続使用がこの文の特徴だと考える。それにしただった試訳を提示すると、次のようになる：

試訳：おまえはまだこっちに来ることができるとでも思っとるな。でも、

実際はその場に立ち尽くしているだけだ。そうしていたいという理由をつけてな。

「お見通し発言」→ (*bloß* で強調・対比される) 実際の行動 → 「お見通し発言」という連鎖で相手の考えを余すところなく暴露することによって、相手への支配力を強く主張することができている。このような、1 発言内における「お見通し発言」の複合的連続使用は極めて珍しい。今のところ、この箇所しか、そのような例は見つかっていない。今後、他の用例も精査し、「お見通し発言」の複合的連続使用例を検討していく必要がある。

## おわりに

カフカの『判決』における「お見通し発言」と見なされる 1 発話文に焦点をあて、その構造を分析することにより、思考動詞の及ぶスコープに関する解釈の違いを明らかにした。その過程で、1 発話内に 2 つのタイプの「お見通し発言」が出現していることが確認できた。しかし、この用例 1 つでは、その意味や意図、効果の違いを分析することはできなかった。そこで、今後の課題として、他の「お見通し発言」を検討し、1 発話内に複数の連続する「お見通し発言」を含む例を収集し、その効果について分析することにした。

(金沢大学人間社会研究域経済学経営学系)

## 文献

- Beißner, Friedrich (1952). *Der Erzähler Franz Kafka*. Stuttgart: W. Kohlhammer (粉川哲夫訳編『物語作者 フランツ・カフカ』せりか書房, 1976) .
- 西嶋義憲 (2004). 「お見通し」発言による対話展開の原理——カフカの対話断片テキストを例にして——. 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』8, pp. 155-168.
- Nishijima, Yoshinori (2005). *Durchschauende Äußerung im Dialog von Kafkas Werken*.

日本文体論学会 『文体論研究』 51, pp. 13-24.

Nishijima, Yoshinori (2015). Ignorance of Epistemological Distance: Rhetorical Use of Non-Evidentials in the Work of Franz Kafka. Barbara Sonnenhauser & Anastasia Meermann (eds.) *Distance in Language: Grounding a Metaphor*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, pp. 167-186.

西嶋義憲 (2016). 『カフカと「お見通し発言」——「越境」する発話の機能——』. 鳥影社.

Nishijima, Yoshinori (2019). “Seeing-through Utterance” as Wordplay: Interpersonal Games in Fictional Conversations of Franz Kafka. 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系 『言語文化論叢』 23, pp. 109-128.

高橋行徳 (2003). 『開いた形式としてのカフカ文学——『判決』『変身』を中心に——』. 鳥影社.